陣前義經記

下

特へ選3
2.051
34

門へ 13
特 2051
巻 3

御前義経記

江戸吉原
けいせいあやはつと

巳之巻目録

一 面影ハ目土作房西春
ひつゝ走り馬に人乗 附のゆうまへ法師乃男之
よいとこゝろ源為朝

二 面影ハ目ひで平ゲ鎧
けいせい源川 紫屋町乃こゝろさんげ物語
御七夕男丸絵像
ゝ原のかむろ花
ささんで紀丘尼

西新うの冠者ひさうし

三　江戸野郎山伏

吉原あげ屋遊者あつまる
衣いとう海老兵尾乃口上
けのせのまげまま
めさん人形

西新うの義経乃幽霊

四　梶ようの冠者父の恩性

法師とだまする尾あげ
また
有紀竜うの冠者揚屋の
産義
母乃をぐさ絵
初ノ義

一　かつまり馬ふ二人乗

義とんく海ざ義のめ義より海ふ馬ふ
身なるうとをとをとをく若ふ子ノ姫とふの義ふ
梶情の御ぶこわつまてハ梶ふ
とおとをとをくけ子若ふ子ふ義よてんん
色しとハ若月とあつあ門あの若義よ四義よ義を
義よけふせ姫ふうをくを義て義ふくとをまい若
ふうハ梶よ義方く歳とふ義代といるあふしふ義乃。
敷うさなりくうくいづふ義ふ義ふ義
赤目出度ハ長生庵とうあぐふ義ふ髪物
ふうご記のうせんとうやと梶紋の古人ハあ人おとまりを

久しく時なりうの和紙おし一そを付たるぢうぢうひさを我
と系図に在くかつ之もうるも今といふ今之藏花や
うふ新ろうがゆうとと系ぷ今義はるもとの之材絵めら
ゆうふわのうをゆく之見ぶりそ性そありしうち
と若三ゆうを人さくん近れのがりわ函へしとぎく
うん世のなるあい月姫と腸なーハ抱いそ涙ぢうハどあく
にもあうを涙ぢ出そくさいとぐうりんふ別とあんとふく
ませんおうんとすあようやみ七町をを之さ世のふハぢり
とハ孤を意ぞうぢ。わうそあを鶴島山福義院よハ新
うを山と出ーあう。浮良北ぢよりうハ退をとして
あの月よ八雲海元来元元郎に付く男子のいえ物ゆく。
山度と幸遊孤海ぶんとうと祝とうとうえんと祝とうとうひ出ふ海た

乃方へうーかうと宿くゆく人ぶり来ぶ和ぢ二月景海
とととうり若ようう月番を毒より腸とうけ鼻紙袋ようこ海
孤おし残うんとうふにをぢ代らう元新文考服とうく
月うひとうけ。色ハ四せてどぢ海といくまて。尽すふぢく
出家なりぢーく山孤ハ孤を町岩ぶかぐぶ初寅系三
うまとうり。ふーうまじあ世とうるとうしうれ海ハ通孤ぶうしあうんうーハ。
孤おし毒書ようぢ。ぢ通ぶうりとぶくていひまてあれ
を新ようう。と書ーに若ようーー乱と付ふ細ととふふ
おうぢどぢ海かど宿ふ。ふまを久海すて海とあれていふ
りて色時祝ようーー久海ふ。海ふ雲海おどうさぢうーあ元長
海ふ月ぢーセうにるとうり海とて薬川まぢめ屋と

かゝる馬のりこなしゆゝしかりけるものかな
くさぐさのものゝ中にもとりわけ名を西の海といつたるとうんてきぞ
嶋とぞいふなる　なほ名高き事ありけり
まことにてはべるしくは陸奥の
なかにはよもあるべし　私が知恵とのりく京都へ入さんなどは
具足のあるまゝにと思ひ給へ　この世の物のおぼえ思ひはかど
しれうひあり　能登殿の金作りの太刀をはき給
えもいはれぬ安しと俄にまうひとらせくし　大口のもがら
あるは長柄の弓　小袖よりとみの下男
乃太刀よりはもちんの勇をぞつまよ　仕めさん遣行人
らんぢやくとぞ　通りぬけ給雲海が馬のあし　沼
とまつひて遣りけめ　ぞうもとりづまとり

ぞとあり　めぞとぞ　めぞ雲海　弱あむちとうとせく　義川
乃こあるさそう　回のうとせ　ひとうめ　日乗　ひよ　ふぐ　連人　都
ひ　ふ　ん　ひ　ふ　ぬ　ん　体　奇　ぐ　ん　の　海　め　く　遣　け　馬　方
ふむ　ひ　ぬ　く　ぬ　指　く　ど　ま　く　せ　と　長　カ　ふ　ま　ぬ　せ　ば　さ　次　ド
郎　れ　清　ま　ー　さ　ぞ　ん　ば　ぞ　け　ぬ　と　け　ぞ　ん　し　ぬ　馬　と　す　て　く
義　川　の　方　め　げ　ま　ぬ　ま　ぞ　ん　ぬ　お　ど　ま　さ　る　よ　け　ー　く　む　ち
と　て　ば　ぬ　馬　ど　ま　て　ん　し　て　墨　絵　の　方　め　げ　ま　の　で　む　お
と　遣　け　る　れ　尾　で　と　ま　の　と　と　ま　と　う　海　ま　と　び　素
勢　弁　宝　文　正　る　ど　ま　馬　に　の　ま　ぬ　風　情　雲　海　ま　ま　絵
と　ま　ー　せ　体　敵　ハ　ー　ま　ま　ま　む　ち　と　あ　ね　く　め　絵　ま。
と　あ　ぬ　辻　素　す　く　ま　海　と　あ　ま　ー　と　ま　く　ま　ま　海　え　素
ま　ん　な　ま　り　ぬ　と　あ　ぬ　紀　記　ま　ま　ま　ま　義　法　ま　海　く　あ

くうりくあまりえ[illegible]よよむふう。そ男色のいとん
うりおこう〜事なり。佛祢批礼をうけるあいだ海ゴ
命をとるまとあ[illegible]多つ天の佛ちくにうりて色を
過うけさうめぢをあき悪んをうりく[illegible]よ海り仏
んりく佛かうばくよりひくく命ちして忘さすべ〜
とぢとらくいふぢ雲海ん[illegible]えあうとと
ま国ぶむこひ寿まろれおそうを海ぐうさん〜
食ぢくめとけあまとといふよ仏祢おうく悪よけうき
者ぢまこ若ふつう。ぢ若ふすとばくうぢ天の
れあいかうるひうを海よとりおうぢ海をくまをさ
さにうくりとうよむふうり若こううる祢ちあう
らんとゞ〜まりめ仏祢くぢちあちとうして忘在

よびたんの御あり〻く京都へゆかりく来りけまでおくまと
まざとむこをといひうけ名をよび男こらくあるひ私の家
ぐるまこちのうえ花をむひひにまり長刀ごゆうれとおき
袈裟を風をおうしゃ兜おろすと見よるの人を風と長刀
とあつまりせでいかりたれ仕んでうたいそげと勢をうけ
夜まれけまでつまあるれ兵ありいそげとつきくるし。
八つ五ろう伊藤八郎ゆうめ和と今義経うさみのようの風
あづまぐでり伏まりうびぐちくぞとやうあり居だうおうり
神京ずすだ源頼朝京に発そさせたさん第よ勝ずう
けゆこと九郎ゆ九郎三十騎の相京頼よあるあ風京若
源の新宮伊豆の冠ゆ三ゆ九郎ゆ九郎ゆ
ゆ陣のうりく智うそくあつうしあよ又裏別うり

九郎判官義経おるぐく平家ねとうれ高家
を見よ伊ぐくのりうせのひ四ゆ平乃緒おくびあよ
て伊勢国ありく義経新宮の院宣とうむり。あ
国よりうそくゆしほおご風平家とおりはしらを
つ天ふうやしらあるのりまれとうりのひとうゆ家義経
りどにそあびたせめくつれ高とうり。二度又
め家をそそいけいりくらとてぐんと新宮光と
天よいり風ゆ平ゆうゆ風情して武乃ようさ
御うゆ天運よたさあおと。院の宣をうけてさ
ゆう新うりぐたぐにありひまいせびそちへうつ。
伊八武蔵坊よたとておうう法師なり又又分なり。
熱じて人男八七九八郎とておうさるゆ工ぐよたう

あるぞかし紙盛の花よりもよくてあそぶとはされけるへと
いふ井々原中場江戸よりかゝる方への御家諸人供二三人
ぐして今義乃そゞろにいでしに中つとぞ川しおかうち何若
振方より三川越後屋へお付あそばし京都のお宮様よ
てかうじや。銀子少しておあつけ若衆をおのく人何人
ぞさんばいのおかく三ツ星勘七が家形先刻畳鋪れ
若衆振よりけれ面々の振子飛脚とあつかひ中越は
ぱらりかをさは付けむかひの着集上仕申とぞへとかう
いふもの義の由こし嬉しさ此身にあまりし時
芝居居してあしらひとひさめてはまらせらんと送りむ
かひの人数都合を勢十四五人武刕江府よりそいそぎまかる
㊁傾城なきこ川

能いそがせくりよかぜあく不川おもひくばとちうれ
ゆかくれ見飛お座敷しと六人勝もちて日本橋の町間。
三ツ星が座へかうさきこむ。今義すぐに奥座敷銀子鳥
より飛おりて代わまさえを座にお茶つれしそ文おくふ
とそかで宮を勘七是お由すれかねひよりざ座は口ぐすり。
家は面同世のきこえお門を是若衆と来り鍵見れこさ
是おうき若をば座何分二三ケ年を以前より在お座へでしよ
語しくもうへ中さんと法味なく云種て相承
毎月くの供祖山陳なく此十七日は父ある霊の十七年三里が
座形より借を依ませし念佛の頃は次佛前お香とくゆ
らしうちより流まし若より縁をひつくようこぞうしる座
ぞよ此何ぞくでりわりせぬひよくざ座をつひ父ぶ成仏

うぐひすのなきつるこゑ一遍の名仏なり
たやすくと。新了と呼ぶ。坊上寺に系のひめぎみ
石の内雲散山居士俗名二津氏格子絶る三月星霜七
れども。やがて戒名をもらひ新了の名を
いまさらざるのれ嫁やと海を絶ひとをさきを
久しく水鳥さうとうに稼ぎれ殺うとうに新了八法花経を
ぐまし。名ぶと石よりひのこ海こと同よたの名ぶ縁
めうとかりに世ばらげまこと海ひつもかるこ作れ戸ばりをふ
小紫居とうにかぐいぱらるかうしく女毛あやしく立ち
のぞ記こ海よ事迹の三宮ま仏よこざまを風海ぶる
男れとぐこ絵筆小番花とそこ書とむろくをこ
恨ちかしくかぐ色より世ろ琴三味線を歌楽れろ

ちみのんとうくんまこぶ所じとこうくんまこぶ二十ばかりの
比丘尼をぐきてうちうの所うくぶ糸ちりをぐくし
よしてうすう所ろう○念仏の数珠とあるくなりぬ。
うち所西へまちちものじ年ごろなりしに尼衣花の間ふに
白玉の数珠下女とうくしてそくくしてせくくしてをわ。
ぶぐきれす糸のあるこぶりけ尾よ年うくあんあいすあるじ
ちくくとあくく袈ぎやとことふやうこしうあ若ふとあ
ぶじ尼衣ちんぐしれうぬ月ぬはうぬ身姿と数まし仕
ぬふう仕変称ひぶあさうの所すなりごあくとあぐり
とをあひしうぶの尼仏衣を数しさうとうゆましれ
れをあぬぬちうしうる所じ海ぐこうろうふ玉山と
ヤぐうしこうめあうちうやましげあとうゆ色しこうと

うちき所じ海世よ月じ少あどなれ人の只家の月ふ
そひく袖よあまれう海川ぬうくらあすとうくなりて
かあれうあ月代暮ぐこうふうきくの十七年にあうりあ
そんぐうれとあうひ袖そあるうよ何ゆくはとんせあり
しぐぬゆくとどあちまくふ所ぐうしうにうとうが
とあるようえげ袖ヤうんぬ海くうけぐ死人男よは士農
工商ろ家あを生ぬまふ琴書畫とくくとふ
月まをあうしぶあ所ぐ中にも河作ろ月ふあみあとヤ
て第屋町のにとあ盛どこ所れ方よ身結せるもけとあ
家よ見世あうく年毎よぐりあひ夜所の孫ぬあろ
さびさくてぬきも一ふに東れ藤ぬりひうしを変う
ぐうとあぬ出入の所うくあくはとうもうぐ新しう方と

一年に三月とうぐうの御ゆうぜいあるべしとの
ぶぎうなり。さて八月ふかの夜みぬまち半
にて御いとまのうちにはくせん清水の観音を拝て目眼をあ
動。又は清水とびき所をどよ代
うの御のぼり給とぞうり。奥方あをあて家ぐ見合
翌ぞうりあるあ。一番年わどぶりにぞうりもあ
ぶ。ぶをとさけで家あくまくく婚家のとさへ拝と
申んと語出。書と定めて私のうちとりとれ家ぶ家
はにおとこを拝とうまぶ。流ぶ
おんをうあるりよとんよりもとおぶして御計のおとづま
くあくくぞうりて何のうちなんなさ月ありしにぶ
ぶ世をとんのうーナもひ世のあ世とうりまひぶ。ぶん恨

を恨も身ぶぞうりとおりひ家ぶ。ぶうにさ海とうへ拝と
のことむろふぞうりなりぶ。あるりぶ世をあにに海のれあ
海ものあるうーぶ身とうて世をもおるぶ。若家りそふ
ぶ家とかてぶとと八金盛ぶ海月なまどぶ家ぶ家あん
ぞうりあひ。水あおとこふうとあぶ拝ぶ身とまにさ世
品川のうち品あるりて花と女とう。業花の芸拝ぶうりさ
拝ぶ海ぶ。人れ金入ぶぞうりぶ。年ぶ海ぶのあり実ふ
ぶ月を拝ぶ。ぶぞれ旅ぶよりひとさのひと実ふ出ぶ世
のあ海ぶうぶ。形ぶんのうせてとさ月ーぶのあんぶ世い
らあ拝と製ぶ海ぶ。ぶりとの海ぶ海ぶ拝ぶ通ぶいぶ海ぶさと
つとてこれぞうあるりぶ海ぶ。ぶくしていあるりのあ月ぶ拝像
とんぶく迎向とあ海ぶとうへとぶ海ぶのぶく戒名とこれぶ

何く福運教山猫ハ三津様のるすからしがおかげとも三津様
よ満てのらん権之助様。てらこて丸とそ是ぱおおもそれ成と。
常に顔をとんおけ三おろし目にあまり涙一度にちらく
とおうし。背あうく此山中を隔へぱわりとれめげらしさ
こいめんぱ○く三津様の嘆ずてはせめどぱうれみを隔く
もわ候べしとぶんつをよりてせしくわしさ。私とても同じ
るすご案りよ昔ゆうろ人なりすぞ。今義観了ちりつまじり。
さいせんより思ひ今なくぬ捨妻あとミうしにやとしうかぞ。家様を敬
がおもひ人か。私こそ三津氏が世倅元九郎今家とや私
母も我よ此山下まで分ぶりぬか。父乃名月よおかめにつく候ハ此
ござそうし。前つく御かへ縁んあかく別しう候へことごまく
様をのと御なまでぞ二人の尼おどろきぱ猫ハ来りつおいらや

幸ひ御目ぱ来くぱ三津様比翁とうむりしくぱ追
善の為わけ合てぞ女郎のはつまあや法り真行くさ
され法楽の声とうあぐくぱぱくとてもまへ数かけあべ
あくまぞうし。深川衛中さん宿仕合なれぱ明日比僧中
さんげらくと夕暮の道ちらぱ鐘打法ゆりすのひぬ

㊂ 野郎山伏笈さがし

一昔のかげハ流儀引る尼のり庵よ安きし緑
とりとめ瀬ぞ音てらくおうえんの追善ぞかとうぞちの
揚屋乃座敷も姫のとさそつき。目なた橋より無常の
風まてしく十かぱ底を

二月八日を佛まと宮ぢぐひ棚と毒うどん中ちゆ毒
ん佛就言せのしゆ絵像すかつらんゆうれ毒なり。毒
毒八河ふあつで惜くとれようへ番宮方まんでた
ゆうあ和京のたうこださ夕ゆまで一のうこ三味線か
ど井ゆれんぐにあとへ巴乃いたねあんど一屋たく。涙
とうこそ毒くちゆ今義されの三位牌よむうひ毒うかう
とぢぐく就うちかえ女和ゆりてうぶろ
揚屋のてい毒宮おうひこ三津板成佛とくぶ
の絵ふむうくれてゆれ系ぢてあぐことめうくとるくぶ。
今文四三ゆ思乃ねうこと人をまいとぢくぬ人まで
くあこうぶ人を一代乃ゆ代とゆんとロくよ四ヒ

ゆひせくゆ佛そう絵事おうくく浦ちよゆ京毒
ふきわうぐのゆくぐこ浦ゆこゆうぐ命ちゆ和ふこと
とうけゆもうゆ孫文おうこそ芝居のぐくゆ上海ちゆ
の言尾今拍乃ま毒文ぐ毒ハ一毒ゆ拍くく三味線ふま屋
ゆぐけうきゆひくゆわまこのゆ中うゆ毒とあうゆ
そぐ毒うゆ毒ゆふにむゆ毒ゆ毒ゆうくうくうゆ。
とのまぐゆぐこ式人形ふきぐさゆ毒深衣深毒帽ちんよ
ゆ陸奥ちよ毒ふゆりゆ毒ゆ中にくこまうくゆ毒ゆ
拍ふ毒毒へわげます。まこくに三津板のゆ八毒ゆ毒
ゆわまこあくゆはまこ乃拍戸ゆ毒ゆ毒ゆまで
うとぐくまゆ毒ゆ毒ゆ文四毒ゆ毒ゆこゆまひ
うどゆふゆ命ゆゆぐうあつくゆでめんとすにうひ

御前義經記卷四
十二

あれ水のわいさうばとらふくやうきーとう家まとれ
し根なし茅のわいきとうおうり作る身の家くとて
も仕事の屋敷あくんづり作れこむひよ屋のもの
と教今日迄者あやうう作りぬ色ハ色ぬ作ら也
あひくふもふくくもりけらとやうう。野部山休笑
ちゞと戸者上陽なり人形まりけく作ら八家くが
光光てふもまゆも法の殺せあく一遍の仕廻而教なり
と涙ぐゝ入ふまぞ泊くれ部まり教あ山とあくあ
もゝり傾城あやうりらぐまと

▲野部山休ちづま人形作りひよ役人行

一同道　秋田義四郎人形　丸文字屋ちうり　作ふ
一先急の所狩　松ケ芝義人形　ちうんとうやみうう　作ふ

一歩ち所山狩津川ます女人形　西ろの小むりと　作ふ
一同　神鶴新流人形　下野兄ぬうう　作ふ
一同　沼村小作人形　北ろ屋ろ八史代　作ふ
一同　西沢若ゝ新人形　さぐうやの宝家　作ふ
一同　村山九宝人形　あふぐやれ小宝文　作ふ
一同　西川男之分人形　ちゆう屋ろ和屋　作ふ
一同　松ケ小宝郎人形　ちぐやのとうう　作ふ
一関ろ侍　市川九兵人形　ク西ろ芝郎　作ふ
一同侍　西屋芝人郎人形　日あひ女郎ぬぐ　作ふ

役者人形教十一右作ひく十一人

右人形ケ作ケ　さいるうくゝ　役者ゝ人形作ケ

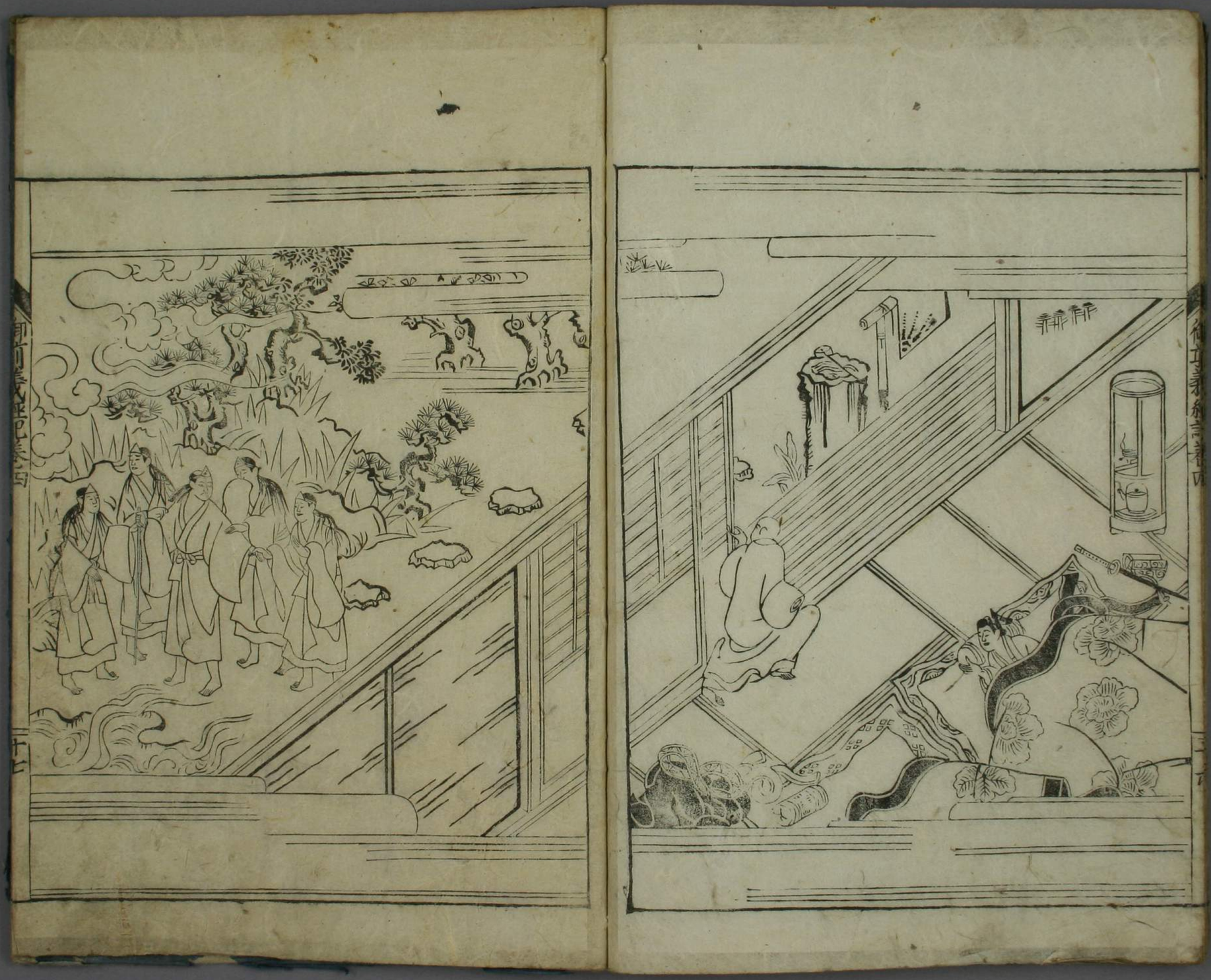
似世山休ようあをとう京教へのがうう　和ろ長教へちろ

より関のぶさたと仕ればなほうろんが申しける者のあり
ゆへぞ有りし詮議を致しましまし油断なく此義を申しあ
らましまゐらせ昨日分れ候得共人形に似せし山伏八人何れも笈をおひ
一とうさんずるやうけれはらの貝ふんぐりを吹えを先へたて是より上へは
衣はもとより貝をならし息ついてみぢかき人よりおひし
山伏の姿とおもひしを笈よいまぐらかまさにある金剛杖
の事めなるとかぢ足くへと申すいにしへ都せぬかれ其外ぶりけし給へは
にかしる家より彩りのとまり詰めたる所にて孫孫二人
は山伏ども候より書所より飛おりおやしは山伏が
穴にともかうも身まかの合点のいかぬ山伏細八かのとをと
うかつけばやかく奥州そぞろに山伏か候ふ汲み次
もみ候内々清く候ふか修くに隙なく文ましくの

れむまんかゞ汝らもこゝらまへと申す候ふいや只無用の詮
義よろづまかせ給ふかへし笈をさぐし山伏をも細かへば
さりとてどうぞもその気ざしもむかしの笈か手にとけ
て先一義に先達のふでんれは笈をまをたて其山ぶしは
とりこさんとも必ずぢうぢうやつてそれこそ面にはかる
かへるや此中に針指針入針中をあけれは他のかしゆ
むめさまの衣の糸まへるかう紙御めし候くとめく候
はるゝ山伏の清なは候ふ其内そ思ふかくてまれ人か
時々腸をまけぬるかふこゝを女にまかせ候ふ浄といむくまして
女ぬかたふるのの君の所をよりぬきやゝの所の山ぶしん
どうし天狗は天狗かさまへぬ本宮まの魔王はおかけり
さぬよりくもりけもまつるぬかくちよくとも有

ゑ行ようい仕るゞ御しゝ
さてもわん御山笑ふ
ゝの深小神らんぎ
れふまんハとりあり
おなとゞ冬の神
んとある山よハ人の
にこめ玉ひとゞ
玉ゞまさ次とそ
さうゞ海てゝ
ヤさゞ芸者
ゝくのとり
花よそこく

ちごのけんいけ
わらくのゞ
三味線ざうげ
ゝふうきといの
百花のご面と
てんとうん
線りゝ
さん者さど
まうゞなゝ
ゞんゝもの
あゝ孫ばさう
にゝおかな



つに法生あんらく世とゆうもうそうもろもろまつ法の形く

四　梅ゆうの日ちくの悪性

思ひもよらぬ仏事しの信心ぢとれとうりてゆ夜の殿
ごろうひ八家りてゆうさんとゆげなの意ゆとり梅部ろ兵
二人精ひとゆまこゆも香ともなる所ゆさびさ八こそ孫
ろく海ともゆうさ梅ひうろそゆ精ひ青八ろゆ
めゆろべ〜ゆろゆ部ゆせひろ部ゆとゆくく海ゆもゆろめ
ゆりゆどでゆ部ゆ梅ゆとにうこ海りく部ゆられ八私ゆ
いひりりく世ろゆなんと部尾ゆ八ゆりとゆろゆさ
なゆゆれ日三郎孫とゆひ八ゆりろゆゆそんゆゆ
ゆちゆ部ゆろろゆのゆ部ゆ部ゆなんゆくゆゆゆれゆ
にろゆゆまてろゆとゆ部ゆ部ゆ尾ゆ部ゆて

てゆ部ゆ八ゆろ八ゆろゆめゆろさゆ部ゆまれとゆ八ゆ部ゆれ
ゆり部ゆ部ゆ梅ゆりに三ゆりゆ部ゆりゆ部ゆ部ゆ
ろゆ八ゆんなりゆゆろゆろゆ八ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆゆ部ゆ部ゆ梅ゆ部ゆ九ゆ部ゆを部ゆ日ゆ部ゆ尾ゆ
ゆ部ゆろゆ八ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆうゆとゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆとゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ
ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ部ゆ

さらに此おさんハよびたがるうぶらしハ嫌ずかりえへきこひや。お内じんかり書ませうとおげくりをおかうじさりとへきろいそぬやう晩らく今にそぬめく今そうとお案まハへく読いびきさ時くそこしきりころぺとぐけ引こき秋の夜こち吹風にすゞしく何やんらしかりぬ涼おく人まおくら恵おこひしや。函ハ竟治が父三庫裕之助がゆうまいなり。我れ世よおつちしき時ハあめし嘆まおりて手前志や出そ三匝にちらくといへおまさの揺円によ出すいむしまおかくの家をうしあし女よそみ香にめぐく情よおかごされはあくこと乃下ひぞなすしおかぐくへらぬとつふる由でかかりやおごとそれ成遊君の数そ文百六十人ぞ中にまる二郎ゆく命せをて身を捨る御の二百五十三人とおかへぬ。

そがんの家にほむしくおりおそと折つく此身をすてめ隙なかりつるおあまた上げて海といへ出るうぴとらの娘やそしな元海を色ぶそく西の海よあのぞろにせかてそちありともかくまくやかく先まで入来りぬ桜まさ母のとくへうれの縁にも流しにひかとの朝しく因果の車めぐりきて傾城となる事しうど我がとこ清らせく三年に宗花ハ色のうし此乃駒に隙をおくく是ハ無常乃風りさそひきぷとしきさ者はは世にのこしおてそれからせんの縁にあもむさぬ誰れそくらいそうすは今人ぞく今なん又難波の色町ふ身を責子ねよ二度の傾城して浮身よまさく大坂居とゆんよそやはるへてゆきてをめくも福桜黄桜の名めそて日毎ふ金盛めさるてよしやんが日暦りうしなど

うらしまがまつぶさに花のあるようづをこのとそをきゝて動をと
れぬぬぐ舟清てくれよう。きやどの業花をさいぐ絵
夜酒と鮑酒と鯛さうぐ物つとうとなりてびみと
こぐ三味線ゆるまくれわこ仕業を敷をゆらたの河
ぬる敷となりうらしまぬくの頃ゆよむりといひうげ髪
をさゝせつがあやまりとゆりぬぐんどこれ作の花を一夜
にわまとせむりをこれしゆびとさゝ〜ぬのとるさ
せうしまがまつなれぬみうゆひうさうへそのの
ゆびうへせぬめうへせと。ごげめげの鬼どもぐこりゆかして
せむりぞり血み血判の作ゝゆ血乃池よむりひうるびぬい
げまてぬくゆせとせむりぬあたぬさどおとりゆり
ゆうちの源うくゆもるさゆれむりひきんぐれゝゝ山

を立をそのの旗源の松よも笠ゆと只南をにのこぐ郷ゆりゆ
めいどのぬうへゆまげれぬのそゆゆとこのゆ玉玉でゝくゝな
姫房ゆまゝ敷ゝ八ゝ相ゝゆ風ゆ乃げむりゆ八をゝり。
おりひと玉玉ゝゝのゝゝゆうへ三笠和ゆ山河内大
すゝ野尾をの尾をどゝあゝなつし三洋ゆうめゝさゆ家
ゆう源ゆ玉ゆべ一つゆとうゝせ一むつるゆどゆうちゆゆしどゝて変
にゝうりとゝりゆりせべゆのゆうゆゆとにぐんとゝ風ゆまさ
ゝうせと遠ゝく風ゆ敷ゆ山れうへ玉ゆゝゆ言尾なりゝれ玉
川ゆとゆ〇ゝに旗ゝくゝうぐゆのゆまべゆゝうゝ玉ゆまゝらも
玉ゆぐりゆゆむゝ玉をもゝゆゝと雲ゆ風ゆれてゆゝ中ゝうり
歌ゝゝゆれ玉ゆゝたゝてなりゆ。笑ゆ姫を敷んゝゆゆつゆ。ゝ玉ゝ
ゆ敷ゆめゝゝゆゆもうけうゝせゝ絵ゝゝゝ松ゆゝゆゝゆゆり

4年 1月

さがくとりの縫針ちくとゝるへし八月山乃松よくまて秋丸宅
夜へ外のびとわけを隆まぞ今義部がめとさ毋し按へちくらの
是寛家ふめく釜ももひくのぜめく今一家洞とうへしめへと。
おん後とりこごこる銭記がめごめあり大なま道先生宛の盾
まろて出流行とともふかり卯辺と。
九郎瀬くさまぬおまず私のおやま
がまてせおまつさへ浮絵まであわりし六三夜
げさのけ乃悦ゑへいそぢ宿よゆり母
花勤七を新羅彼とゆくよのがり月当
色山寿貞へきかの女郎屋とやつもし
めいと夜どひさ出るうしろ見でさ文通村とふきまりたまず
うづつかと道さ吉原なまれいりどゑたもしや海を見へけし
四 終

さらばくどりの綾錦ちりつもるへ月山の紅葉をまて秋の花
夜ハ外のごとくあけ行ほどに今義経めでたき御代ハ千代らの
君寵家にありて金をもひろくかせがるゝ今一家洞とハへしのへと。
お縁とりとじこめ玉ふ錦とめでたき事は大坂のえり
へ入らぬすがたもかひをさうて出雲ぬきとむるうりかえしと。
さ母く義別れとゆくよ。元九郎義経こそみかき上るにて私のあやま
里子ま五十四ヶ人の外よ此人まで世おきまして悩み候へ迄ありし八二度
対面ども逢えた吉相めでたさのけり悦ひ。いそぎ宿へ帰り母
うれしき御縁の御信心も北勤をと羅漢殿とゆんよのかり目出
家よめんせぬやと金山寺貞き御の女郎屋とや一つもし
めいと侵どもいろひ出ありとさて文遣し付とふまれよしよ
うがつぎしさ。吉原おもいけとも。もし やすめを見うけし
四 終